

駿建

2017 Jan. vol.44 No.1

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

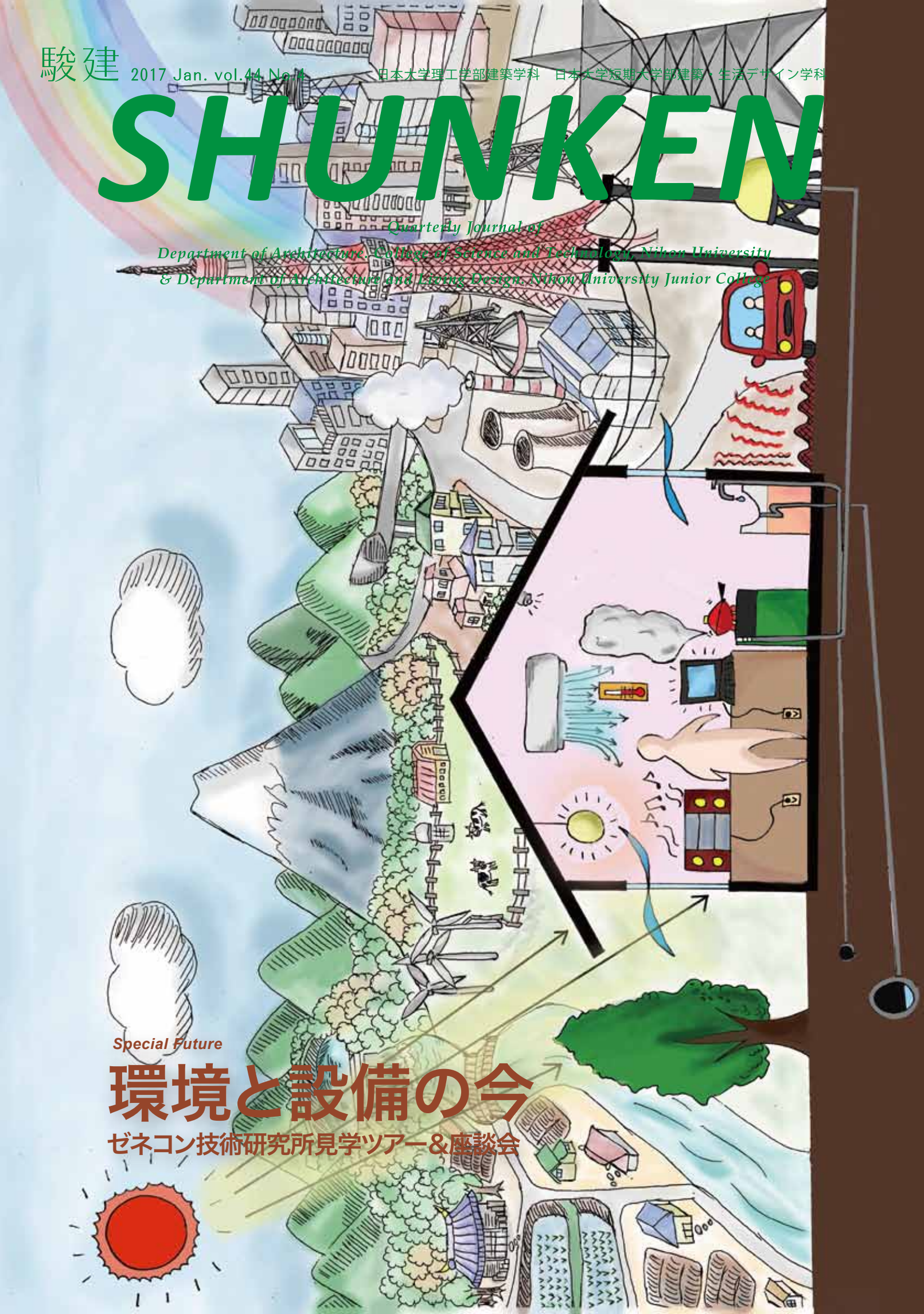
Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College

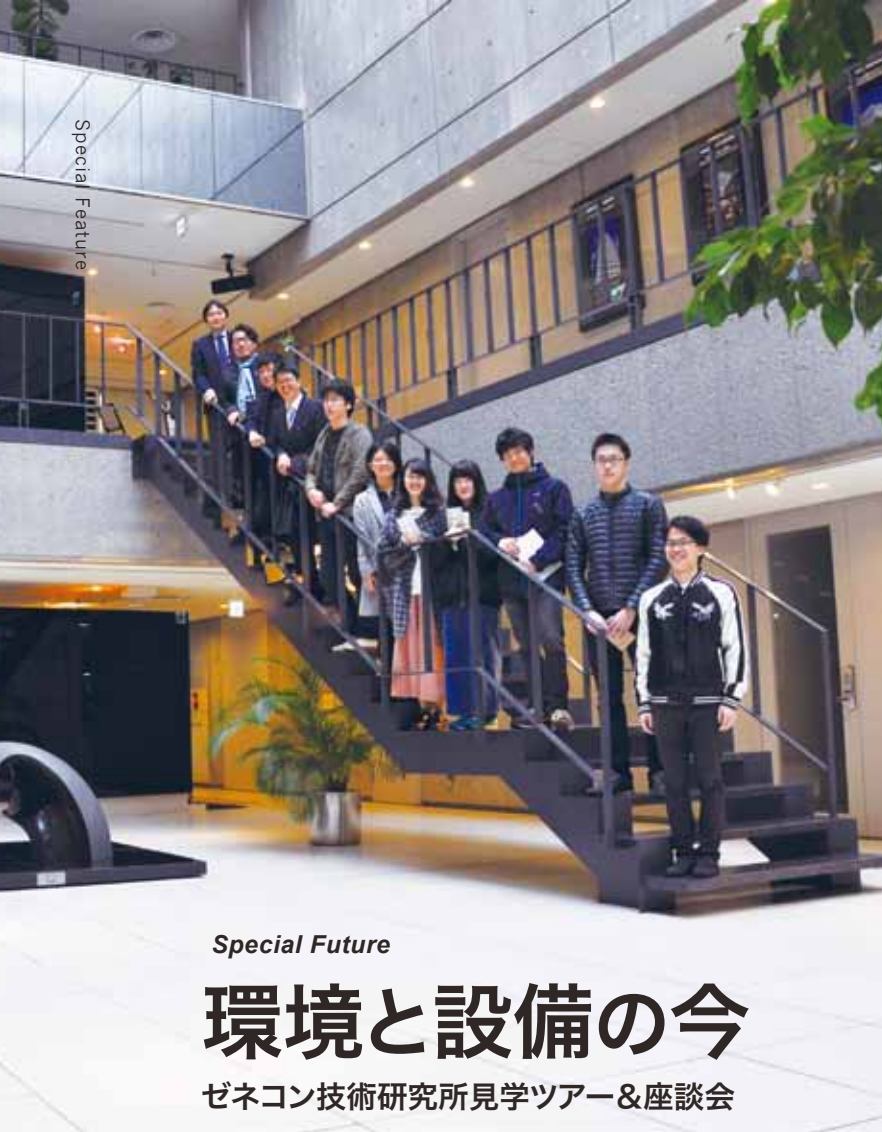


Special Future

環境と設備の今

ゼネコン技術研究所見学ツアー&座談会





Special Future

環境と設備の今

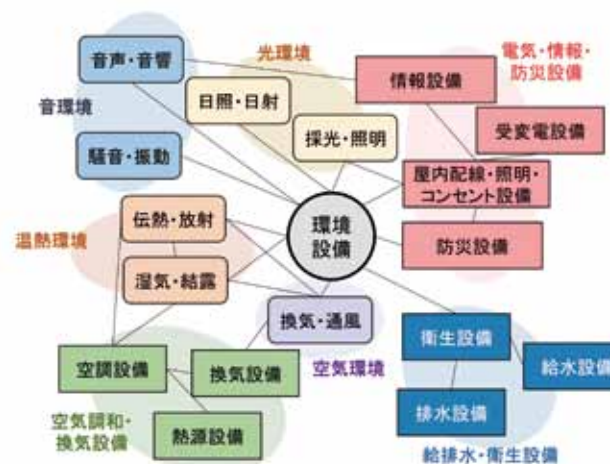
ゼネコン技術研究所見学ツアー&座談会

カリキュラムを見渡してみるとわかるように、建築にはさまざまな分野があります。そして、それらが複雑に絡み合い、統合されることで、建築は形づくられています。どの分野もそれらひとつだけでは成立することができません。

今回の特集では、中でも、環境や設備といった分野にスポットを当てることにしました。環境や設備は、みなさんにはどのように映っているのでしょうか。具体的に覗いてみると、右図のような世界がそこには広がっているようです。

「環境と設備の今」を知るために、最新の実験施設があるゼネコン、鹿島建設の鹿島技術研究所を建築学科3年生のみなさんと先生方で訪ね、研究が行われているオフィスや施設内のさまざまな実験室を見学させていただきました。現地で日々、働き、研究されている方々に直接案内をしていただきながら、さまざまな驚きや発見を得た上で開催した座談会の模様をお届けします。学生や先生たちは、何を見て、何を感じたのでしょうか。「環境と設備の今」から、建築の新しい捉え方と楽しさを紡ぎ出してみましよう。

- 参加学生（3年）：小館葵、小野美月、月東雄規、川上大夢、長谷川謙人、氷見博法、吉本尚世、
- 参加教員：富田隆太 准教授（見学のみ）、橋本修 准教授（座談会のみ）井口雅登 助教、古澤大輔 助教、二瓶士門 助手
- 協力：鹿島技術研究所（峯村敦雄、三浦克弘、高山こずえ、田中彩）



💡 環境・設備 専門用語 ミニ解説！

フラットスラブ：梁を用いず、柱のみで床スラブを支える架構形式。床スラブの下に梁がないため、天井裏のスペースを有効に使うことで階高を抑えることができる。構造がシンプルになり、窓を大きくすることも可能。

コアンダ効果：壁面や天井面に沿うように吹き出された気流が、その面に吸い寄せられて付着して流れていく効果。天井面近くで空調空気を吹き出すことで、天井面に沿って遠くまで気流を届かせることができる。

ダクトレス：ダクトを用いずに空気を送り届ける方式。建築設備では、空気がダクトによって各室まで送り届けられるのが一般的であるが、ダクト設置スペースが必要となる。ダクトを用いずに空気を送り届けることができれば、スペースの節約が可能となる。

環境と設備の今

[巻頭寄稿]

text=井口雅登 助教

ゼネコンの 技術研究所を 見学して

今回は、ゼネコンの技術研究所の方々にご協力いただき、実際に仕事をするオフィスや専門的な実験施設を見学させていただきました。参加者は、環境・設備に興味を持つ建築学科3年生7名と環境・設備や設計・計画の先生方です。

はじめにプレゼンテーションルームにて、技術研究所の仕事内容や建物の概要について説明を受けました。洗練されたモノトーンのデザインの室内で、大画面プロジェクターにより紹介ビデオを見たのですが、学生のみなさんは少し緊張気味のようでした。

その後、オフィスを見学しました。この技術研究所は新しく建てられたばかりなので、さまざまな工夫がなされています。オフィスには、研究者がひとりで集中するためのパーティションで囲まれた「個室」と、ちょっとした打合せが可能な「ハブ」と呼ばれるスペースが用意されています。「ハブ」には、可動式の机やホワイトボードがあって、発想を刺激し合うコミュニケーションが誘発される工夫がなされており、まさに集中と協働が実現できる設えとなっていました。

環境・設備の面にもさまざまな工夫がなされています。オフィス空間には天井がなく、上階のフラットスラブがむき出しとなっていますが、その近くに空調吹出口を設けることで、空気が天井を沿うように流れていくコアンダ効果を利用した空気搬送を行い、ダクトレスかつ開放的な空間を実現しています。窓周辺のペリメーターゾーンでは、床下付近とブラインド下部の空気を吸い込んで空調を行っており、シングルガラスの窓でありながら、室内の快適性を損なわない工夫がなされています。「個室」付近には、全体空調のほかに、それぞれのエリアを担当する空調機も設置さ

れて、人がいる時間のみ個別に空調を行うこともできるようになっています。

照明設備は、いわゆる「タスク・アンビエント照明」が採用されており、天井面の直接照明で明るさ感を確保しながら、少ない電力で照度を低めに設定し、デスク上の作業用照明で手元を明るくするようになっています。消し忘れによるエネルギー浪費を防ぐため、19時と24時30分には自動的に間接照明のみになり、残業をする場合は再度照明を点けるという運用がなされているようです。

音環境にも配慮がなされています。天井の一部に木毛セメント板を配置することで、「個室」間の音の伝搬を低減するとともに、音環境と意匠性の両立を図っています。学生のみなさんは、たくさんさんの環境・設備に関する工夫を目の当たりにして、少し圧倒されていたようですが、興味深く見学していました。

続いて、少し離れた実験場にバスで移動しました。実験場には、環境・設備をはじめさまざまな実験を行う施設があります。はじめに見学させていただいた部屋は残響室でした。残響室は、壁や天井が音を反射しやすいコンクリートでできていて、大変響きやすく、さまざまな材料の吸音率の測定などに用いられます。音圧の偏りを防ぐため、室内の対向する壁や天井が平行にならないように工夫がなされており、少し変わった感じのする部屋となっています。

次に案内されたのが無響室です。無響室は、残響室とは反対に、壁や天井が音を吸収するグラスウールでできており、ほとんど音が響かないため、音源の指向性などを調べるときに用いられます。吸音材に囲まれているため、室内は大変に静かで、自分の話した声も壁や天井にすぐ吸収されてしまい、とても不思議な感じのする部屋となっています。後で学生のみなさんに聞きましたが、やはり感覚的にわかりやすい残響室と無響室の印象が大変強かったようです。

また、特殊な置換空調を行う手術室を模した空間（実際に人形が手術を受けていました！）や、窓の外の温度を変化させてオフィスの窓周りの温熱環境を計測する実験施設などを見学しました。さらに、立体音響システムや展示ルームでさまざまな展示を見学したほか、最後には研究者の方々に素朴な疑問を聞く時間もとっていただき、盛りだくさんの見学会となりました。協力してくださった技術研究所のみなさん、ありがとうございました。■

表紙のイラスト：建築物内の環境という点、温熱や空気、音や光環境などが挙げられますが、建築物を快適に利用するにはさまざまな工夫が必要です。また、建築物内の環境を整え、安全性や利便性を向上するには、多様な建築設備と電気やガスなどのエネルギーが必要です。環境・設備の今を考えるにあたり、快適性や安全性、利便性を追求しながら、省エネルギーや周辺・地球環境との調和を図っていくことが重要となるため、その全体像を示すイラストを制作しました。（イラスト：井口雅登 助教、野口あかり（4年・蜂巢・井口研））

ペリメーターゾーン：建築物内部の外周付近で、日射や外気温などの外界条件の影響を受けやすいゾーン。一般的には外壁から3～6mの付近。同一の建築物でも領域によって熱負荷が異なるため、システムをいくつかのゾーンに分けて空調を行うのが一般的である。

シングルガラス：ガラス1枚で構築された窓ガラス。近年では、結露防止や省エネのため、2枚のガラス間に空気層を設けたペアガラスによって断熱性能を高めることが多い。シングルガラスは、ペアガラスに比べて断熱性能は劣るが、コスト面では有利となる。

木毛セメント板：木材を薄く細い形に削った木毛とセメントを混ぜて加圧成形した板。下地用、化粧用として天井や壁に用いられる。耐火性に優れるだけでなく、吸音性や吸湿性にも優れる。

置換空調：床面から給気し、室内の発熱による上昇気流を利用して天井付近から排気する空調方式。上昇気流によって、室内の汚染物質が天井方向に移動して排気するため、一般的な方式に比べ換気効率が良い。

立体音響システム：少数のスピーカーで、立体感のある音を再現できる音響システム。前面の2つのスピーカーからのみの音でも、上下・左右・遠近などの立体感をつけ、臨場感を出すことが可能である。

環境と設備の今
〔座談会〕

学生目から見た 環境と設備の今



はじめての技術研究所

井口先生：午前中は、ゼネコンの研究所で環境・設備の最新の技術を見てきました。午後は、「環境と設備の今」を知るため、座談会を進めたいと思います。

橋本先生：それではまず、見学して、感じたこと、どうしてこの企画に参加したかという動機も含めて聞かせてください。

月東：僕はまだ、4年になって所属したい研究室を決めきれないところがあって、設備や構造など、いろいろな分野に興味があります。今回は、ゼネコンの研究所に行ける機会があるので参加しました。技術研究所では、自分の企業で率先して新しい技術を実験・開発している点に感心しました。

古澤先生：技術研究所で働く田中さん（右写真）が、学生時代に研究していたことと今の仕事の内容が同じだとおっしゃっていましたね。とてもうらやましい環境だと思います。



長谷川：就職すると、大学で学んだ研究してきたことを、あまり使わないという卒業生の話も聞きます。

橋本先生：このような研究所に採用するときには、その人がこれまでどのような研究をしてきたかを見ます。だから、大学院を出た人は、自分が研究してきたことをまとめたポートフォリオを持って行きます。たとえば音の研究では、特化した部分だ

けではなく、音響の測定などの技術は共通の部分があるので、大学で研究したことが、そのまま仕事としての研究になることは少なくありません。

川上：僕は進路が明確に決まっていなくて、いろんなことを勉強できたらいいなと思って参加を決めました。技術研究所のように、たくさんの施設や機器がある中で仕事ができるのは、やりがいがあって、楽しそうだと思います。

古澤先生：私も、はじめて技術研究所というところに行きました。特に研究者のみなさんでも、働く場がビルディングタイプとしてはオフィスビルだということをはじめて知りました。考えてみれば当たり前の話なのですが。

小野：私は音に興味があって研究がしたいと思っているのですが、友だちから「研究職には合わなそうだよな」と言われたことがありました。そこで逆に、研究職について知ろうと思って参加しました。

橋本先生：理工系の大学では、何を研究しているかが具体的にわからないところがあるかもしれませんね。たとえば音は見えないから。

古澤先生：なるほど。「音は見えない」は名言ですね！

橋本先生：音は見えないから、音を具現化するには、かなりの工夫が必要です。私が話している声も、今、みんなには聞こえていますが、その先で、騒がしく聞こえる、心地よく聞こえるといった感覚が入ってくると、面白くもなり、難しくもなります。

3年生のみなさんは、大学生活を3年間送ってきて、だんだん好きなものや気になるものをキャッチできる時期になってきていると思います。だから、今日の見学会に参加した意味がある。何か、見学をしたときめくものはありましたか。



技術研究所のようなところで仕事ができるのは、やりがいがありそう。

建築という世界そのものに興味を持つことが、一番大事だと思います。

橋本修 准教授



吉本：私は音や振動に興味があって、進路のひとつとして研究職を視野に入れていたので参加しました。今日、入った無響室や残響室は、以前別の施設で見たことがありましたが、規模や装置が違って驚きました。まだまだ知識はないのですが、より勉強してみたいと思いました。

古澤先生：あのような実験施設って、本学の船橋キャンパスにもあるのですか。

橋本先生：船橋キャンパスには、普通の部屋を改造して半無響室にしたものがあります。駿河台キャンパスには、かつての6号館屋上のペントハウスに無響室がありましたが、6号館が取り壊されたので、なくなってしまいました。数年後、南棟（仮称）ができた際には、屋上階に無響室ができる予定です。

二瓶先生：ゼネコンの技術研究所には、いくつか行ったことがあります。今回の技術研究所は、雑誌に掲載されているのを見えていました。シングルガラスの窓や、コアンダ効果を使った空調などを実際に見ることができて、よい機会になりました。

古澤先生：自分たちが勤める会社の建物で、それ自体を実験場としている点は、研究者の鏡だなと思いました。

たとえば、間接照明があんなに空間に影響しているとは思いませんでした。机上面の照度は直接光で出ているから十分に思えるけれど、雰囲気は暗くなってしまふ。それが間接光により一部の天井を照らすことを加えるだけで、あれほど雰囲気が変わるんですからね。

橋本先生：空間の明るさに対する認識は、視野内の明るさ感の影響のほうが大きいです。水平面照度をもとに設計すると、壁が真っ暗でも一応作業はできます。ただし、空間の明るさ感を考えると、鉛直面に明るい部分があると、机上面が多少明るさが低くても、全体として明るいと感じることができます。

設備や環境はもちろん、もっと いろんな分野を覗いてみたいです。

月東雄規（3年）

氷見：僕は、実家が設備業を営んでおり、道具や配管が身の回りにある環境で育ちました。だから、自然と設備に興味を持つようになっていました。見学会があると聞いて、興味のあることで見たことのないものが見られると思い、応募しました。特に無響室は面白かったです。

古澤先生：残響時間の差でこんなにも空間の印象が違うのかと改めて感じました。我々は、いつも空間は目で見えていると思っているけど、それだけではない。

井口先生：目で見える技術の結晶よりも、やはり身体で感じる感覚のほうが、学生にとってはよりわかりやすく面白いのかもしれない。

小館：私は短大からの編入生です。船橋キャンパスの半無響室で実験をしたことがありますが、ゼネコンの無響室にも入ってみたいという単純な理由で応募しました。実際に行ってみて、オフィス空間にも吸音板が使われていて、このような工夫をするために、無響室や残響室での実験があるのだと改めて感じる事ができました。

長谷川：僕は入学したときから設計が好きで、雑誌を開いても目に見える建築物そのものばかりを見ていました。しかし、3年生の後期になって、今まで目に見えなかったことに注目して建築物を見てみようと思いました。特に、光だけを集めたある雑誌を見たとき、とても面白いことが書かれていました。どうして今まで、こういうことを考えてこなかったのか、と思うことがたくさんありました。すごい分野だということを目の当たりにして、最近は環境について深く考えるようになりました。





どの専門分野に行っても、全体を俯瞰することが必要だと痛感しました。

古澤大輔 助教

古澤先生：環境や設備といったこれまであまり知らなかった分野が、設計にもフィードバックできることに気づいたのです。そもそも設計はひとりではできず、設備設計者、構造設計者などとコラボレーションして進めるものです。だから、本来は設計、設備、構造といったものを融合させながら教育をすべきなんだけど、それができていない。どうしてもまずは計画的な面を教える必要があるからです。でも、長谷川くんは、そこをクリアしたからこそ、次のステップが見えてきたのかもしれません。

大学院へ進学するか就職か

橋本先生：今の時点でこれからどうしようかということ、もがきながら考えていることを聞かせてくれますか。

月東：私は、大学院に行きたいと考えているのですが、大学院に行って研究に取り組むことが、修了後の就職などで、どれだけ幅を広げることになるのかが気になります。

長谷川：就職は学部卒でもできますが、大学の研究の延長線上にある仕事をしたいのならば、大学院を修了しなくてはいけないという話を聞いたことがあるので、そのあたりを知りたいです。

川上：私はまだやりたい職業は決まっていません。そういう人が大学院に行ってもいいのか、きちんと将来を決めた人だけが行くところなのか聞きたいです。

小館：環境や設備の分野では、先生たちの会話を聞いていても、

技術用語を知らないとわからないことがたくさんあります。だからこそ、ある程度学ばなくては社会に出て役に立てないのでは、と感じました。学部卒だと1年間しか研究室にいられません。だから、大学院に行かないと研究職に就けないという話は納得できます。

橋本先生：4年生の卒業研究の時点で、自分自身でテーマを掲げることは難しいと思います。たとえ自分でテーマを決められたとしても、時間が足りなくて、道半ばで卒業することになります。だから、大学院に行かないとできないのではなく、行けばできるということだと思います。自分でテーマを設定して、自分なりにもがいて、自分なりに答えを出したいという意味が少しでもあれば、大学院への進学は選択肢のひとつにすべきでしょう。そこでやりとげられれば、大きな自信にもつながると思います。

小館：先日、インターンシップ先でグループ面接がありました。そこで、興味のある研究分野を聞かれたのですが、同じグループの大学院生は難しい用語を使っていて、自分との違いがあると痛感しました。

橋本先生：それはそれほど落ち込む話ではないと思います。学部卒と大学院修了の学生がいたときに、企業は必ずしも大学院修了の学生を採用するわけではありません。難しい専門的な用語が出てくるというのは、難しい英単語を知っているかどうかと同じことです。それよりも大切なことは、興味があることにどれだけ真剣に取り組めるかということで、企業の人たちもそういうところを見ていると思います。

古澤先生：その通りですね。知らない用語があっても、そんなに気にしないでいいと思います。採用する側から見たら、ひとつのテーマに対して、どれだけ追求できる人材なのかを知りたいわけです。

将来は、自分の夢に近い“音”に関する取り組みでみたいです。

小野美月（3年）



目には見えない環境について、 最近深く考えるようになりました。

長谷川 謙人（3年）



橋本先生：でも、大学院へ進学したばかりのときには、不思議なことに、自分に実力がついていのかどうかは、あまり自覚できないかもしれません。自分でテーマを立てて、それに対して何をやるかがわかるようになるのは、大学院2年生になるくらいだと思います。学部時代は、どうしても受け身で授業を受けがちです。それが大学院になると、受け身では進められないので、さまざまなことを理解するのに少し時間がかかる。これは環境や設備だけではなく、どの分野でも共通の話だと思います。

建築への興味の源泉

古澤先生：みなさんは、建築に対する最初の興味はどのようなものだったのですか。

月東：もともと建築を見るのが好きでした。そんなときにコンサートホールを体感して、こういう音をつくり出せるような人たちは、どうしているのかを考えてつくっているのに関心を持って、音の分野に関心を持ち始めました。

川上：私は、まだ完全に環境や設備といった分野に進むことを決めていないのですが、決まっていなからこそ、見られるだけ見ておこうと思って、今回、技術研究所を見学させていただきました。

氷見：僕は、先ほど話したように職人稼業の中で育ってきたので、高校時代から夏休みなどに建設現場に出ていました。大学に入り、さらに興味を持ったのですが、次は現場ではなく、学問的視点から設備や環境の世界を見てみたいと思っていました。

古澤先生：そういった環境で育ったのであれば、とても相性がいい。幸せなパターンですね。

小館：私は、高校時代に吹奏楽部でトランペットを吹いていました。ひとりでソロコンクールに参加することもありました。あるとき、会場が変わると音の響き方が変わること気づいて、漠然と建物と音の関係に興味を持ち始めました。建築学科に入って、最初はコンサートホールの設計がやりたかったのですが、それ以外にも音環境というものがあることを知って、もっと視野が広がる研究室に入れたらいいなと思いました。

吉本：私も、高校まで吹奏楽をやっていました。音の響き方が環境によって変わるので、ホールによってどのように演奏するかをみんなで話し合っていました。コンサートホールの特性を、数値ではなく、自分たちの体感、耳で考えていたのです。だから、大学に入って、今度は計算といった観点から音の研究をしてみたいと思っています。

橋本先生：おふたりの話を聞くと、それぞれの音の研究は高校時代からはじまっていますよね。

古澤先生：そういう実体験があるのは強いですね。まず、こういうホールが良いホールだという実感があって、研究を通じてそれを定量的に評価し、数値化することができれば、それは他の人とも共感することができるわけですから。

橋本先生：音を通じて空間に興味を持ったり、疑問を持ったりすることは良いことだと思います。だから、建築に興味を持つのも、きっかけは建築そのものでなくても良いわけです。

そういう感覚の話はとても大切です。数値的なこと、技術的なことを研究していても、実際に音楽ホールに行かない人が音響設計をしたらどうなるでしょう。それでは感覚の部分とずれ

楽器演奏をとおして、音の響きと建物の 関係に興味を持ち始めました。

小館 葵（3年）





吹奏楽を通して体感していた音を、 研究してみたいと思っています。

吉本尚世（3年）

が生じてしまって、話にならないことがあります。これは他の分野でも同じことですね。

小野：私は、小学生のときに学芸会で照明係をやったことがあります。生まれてはじめての裏方の仕事だったのですが、舞台上に出ている人だけではなく、実は裏方もまたすごいということに気付いて、それから裏方の仕事をやりたいと思うようになりました。高校生のときには、音響ミキサーを経験して、音の世界って楽しいなと思いました。祖父がゼネコンに勤めていたことがきっかけで建築学科に入ったのですが、自分の夢に近い音に関するることに取り組んでみたいと思っています。

橋本先生：たとえば、私の研究室に興味を持ってくれる学生と話をする、ストレートに音に興味がある場合には、接点を持ちやすくてとても良いと感じます。でも逆に、音にしか興味がないと、社会に出てから音と関係のない仕事に就いたときに、「音じゃない、どうしよう」となってしまうこともあります。だから、自分の興味や得意技には、幅を持っておくことも大切です。

大学の環境や設備の分野に求めること

井口先生：日大理工建築では、環境という分野は大きく「音」「光」「熱」の3つに分かれていますよね。

橋本先生：うちの大学の教育カリキュラムがそうなっているからです。環境工学Ⅰは「熱」、環境工学Ⅱは「音」、環境工学Ⅲは「光」というふうに要素別の科目配置になっているので、何に興味があるのと聞くと、学生は「光です」と答えたりするわ



けです。しかし、本来は、それらが複合的に影響しあって「環境」というものがあるということが大事なんです。

みなさんは、来年研究室を選ぶわけですが、どのように進む分野を選びますか。

月東：私は行きたい研究室を自分の中で探しながら受けていて、受かった中から、一番そのときに興味を持った分野に行きたいと考えています。音だけに興味があるわけではないので、いろんな分野を覗いてみたい。もっと、設備や構造、設計の人たち同士が交流できる場が、大学にあったら面白いと思います。

橋本先生：本当はそういうことがやれるプロジェクトがあったほうがいいですね。学科内の異分野間の交流が少ないですし、設計課題でひとつの空間を設計するのであれば、構造や設備、環境などと関わりがあってもいいわけです。

古澤先生：本当にその通りです。教員同士がもっと交流すべきだし、その交流を見える形で行うことが重要です。今日、専門外の私がここにいることも、そういう意味があると思って参加させていただきました。

橋本先生：今日ここにいる学生たちは、環境や設備の分野に興味のある人がほとんどですが、設計の分野に行きたい学生たちは、3年生くらいに決めているのでしょうか。

長谷川：まわりを見ていると、設計をがんばっている友達たちは、2年生の段階から、研究室は設計の分野へ行きたいと話しています。

橋本先生：なるほど。設計の分野では、たとえばコンペティションにトライすることができます。でも環境などの分野では、何かがんばろうと思っても、コンペといったものはありません。

最新の設備や環境を実際に見ることが できて、よい機会となりました。

二瓶士門 助手

自分の研究していく技術が、建築に どう応用されるかを常に考えよう。

氷見博法（3年）



だから、自分磨きをするチャンスが多くないですね。

環境や設備の分野には、専門職のイメージがあると思うのですが、今日訪ねたような会社の技術職に就くことを考えすぎないほうが良いです。たとえば、私の研究室を出ても、技術職に就く学生もいれば、住宅メーカーに就職する学生もいて、施工に就く学生もいます。だから、環境の分野に触れることで、人間の感覚や、その空間と環境の関係性を勉強することそのものが大切だと思うのです。

研究することに最も大切なこと

古澤先生：研究室紹介をこのように行ってほしいといった要望は、学生のみなさんからありますか。

月東：今、3つの研究室に興味があるのですが、正直、あまり特色が見えてこないです。夏休みなどに、各研究室に興味のある人たちが集まって、一緒に作業をできるような機会があったら、それぞれの研究室の特色が見えて、知ることができると思います。

長谷川：設計課題の講評会では、建築家の専任・非常勤の先生たちが、先生同士で批評し合っているところを見ることができ、そこで、先生たちの考えていること、性格がわかってきます。同じような感じで、構造なら構造の先生同士、環境なら環境の先生同士で話をしている場面が、もっと見られる機会があったらいいと思います。

橋本先生：確かにそうですね。環境・設備のジャンルは、その中で分野が細かく分かれているから、ディスカッションをしても、深いレベルでかみ合わせることが難しいかもしれません。それでも、共通項を探りながら、学生のみなさんに見せるようにしたほうが良いと思います。

古澤先生：どの専門分野に行っても、やはり全体を俯瞰することが必要だと、今日の見学に参加して痛感しました。

さまざまなことを定量化、数値化することは、研究内容やデザインを他者と共有できる強いツールになります。一方で、定量化された数値が良いから、正しい建築になると単純に言い切れない側面もあります。だから、みなさんには、これから自分の研究を行っていく技術が、建築にどのように応用されるかということを常に考えながら、俯瞰する視点を持って分野を横断するような人になってほしいと思います。

人間としても同じだと思います。数値の成績が良ければ魅力的な人間かという、そうではないと思います。ちょっとくらいダメなところがあってもいいわけです。

橋本先生：研究者には、狭く深く研究を行って、他の分野や技術にはあまり興味がない人がいます。しかし、それでは結果的に、自分の研究そのものを狭めてしまうことになります。だから、深いところに一本研究の軸を持ちつつも、広く浅く、他のことにも興味や知識を持つことが大事です。建築という世界そのものに興味を持つことができないと、どの分野に飛び込んでもうまくいかないと思います。

井口先生：みなさん、今日はありがとうございました。ぜひこれからもがんばってください。

■

日大理工建築では、「音」「光」「熱」 環境は3つの分野に分かれています。

井口雅登 助教



環境と設備の今

[Q&A]

専門外の先生から 環境・設備の先生へ 素朴な疑問

分野が異なるとなかなか聞くことができない素朴な疑問。今回は、環境・設備以外を専門とする先生方から、環境や設備の分野に対する素朴な疑問を集めて、環境・設備の先生方に紙面上で答えていただくことにしました。環境や設備に対する“なんだろう？”は、日常生活の中でもふと思うことがあるかもしれません。ぜひそんなときは、先生方に気軽に聞いてみてください。またその先に面白い世界があるものです。

Q1 「環境」と聞くと、「自然環境」と勘違いする人も多いと思います。その違いは、どのように説明できますか？

A1

「自然環境」は、人工的なものではなく、森林や海など自然により形成される環境をいいます。一方、建築における「環境」は、都市や建築空間、つまり人工的に構築された空間における温熱、空気質、音、光などの性質を指します。建築環境工学は、都市や建築の設計によって空間の温熱環境、空気質、音環境、光環境などを最適にすることを目指します。

しかし、建築空間の「環境」と「自然環境」は無縁ではありません。建築空間の環境を快適にするためにエネルギー消費やCO2排出量などが大きくなると、自然環境に負荷をかけて破壊してしまい、長い目で見れば人間の暮らす環境に悪影響を及ぼします。したがって、都市・建築空間の設計においては、「自然環境」へも配慮し、エネルギー消費やCO2排出量を低く抑えながら快適な「環境」を実現することが求められます。(羽入敏樹 短大教授)

Q2 「音の反響」「光の眩しさ」「熱のオーバーヒート」……建築空間を成立させる“環境的な要素”を設計に落とし込むことを教えるには、どうしたらよいのでしょうか？

A2

環境工学は、もともと建築計画原論と呼ばれていた分野であり、建築の設計と密接な関係があります。環境工学は、理論的に現象を説明し、定量的に扱えることに加えて、建築空間にいる人間の快適性を向上させる分野です。そのため、建築物が竣工し、利用者が建築物を利用しはじめると、すぐに快適性が評価されます。つまり、不十分な建築設計では、すぐにクレームにつながります。責任がすぐに問われる分野ではありますが、その反面、やりがいがある分野とも言えます。

質問について、たとえば、音の反響などでは、エコー（反響）が生じる理論を説明し、実際にどのような空間で生じやすいか、その対策方法を含めて、建築設計上の留意点を説明しています。さらに、エコーに関する演習課題を行うことで、具体的な計算方法も説明しています。以上のように、環境工学の授業では、現象の説明に留まらず、建築設計や建築計画を意識した授業展開を行っています。(富田隆太 准教授)

Q3 コンサートホールの音環境は、どのように設計 するのですか？ また、音が良いお勧めの コンサートホールを教えてください。



A3

コンサートホールの音響は、壁や天井によって生み出される反射音によって決まります。近年、完成後の音響を設計段階で精度良く予測する手法について研究が進んでいます。そのため、ホールの音響設計では、コンピュータシミュレーションなどによって予測される音響効果を耳で聞いて確認しながら、壁や天井の形状や角度、材質などをきめ細かく決めていきます。

コンサートホールはさまざまな形をしていますが、その形状によって響きの特徴が異なります。おおまかにシューボックス型、ヴィニヤード型、馬蹄型などに分類でき、シューボックス型では、楽友協会大ホール（ウィーン）、ボストンシンフォニーホール（ボストン）、コンセルトヘボウ（アムステルダム）が有名です。ヴィニヤード型では、ベルリンフィルハーモニーホール（ベルリン）、サントリーホール（東京）、札幌コンサートホール Kitara（札幌）などが挙げられます。馬蹄型は本来オペラ用ですが、コロン劇場（ブエノスアイレス）のクラシック演奏形式での音響は素晴らしいと評判です。また、東京文化会館（東京）は六角形の特徴ある平面形ですが、明瞭で暖かい音質に定評があります。その他、東京には2,000席規模のコンサートホールが数多くあり、世界的にもこれほど充実した都市はまれでしょう。ぜひ自分の耳で音響の違いを聞き比べてみてください。（羽入敏樹 短大教授・星和磨 短大准教授）

Q4 人の感覚を標準化することは難しいと思います。環境実験において、 被験者の性別や年齢などで、結果は変わってくるのでしょうか？ また、 適切な評価を行うためには、どのような方法が望ましいですか？

A4

確かに感覚は、人の違いによって、またその場の条件で変わりやすいと考えがちです。しかし、室温が23度と聞いて、ほとんど人が不快とは感じないように、ある環境条件の下では、人はほぼ一定の感覚を持つので、人の感覚と環境条件とを対応付けることが可能です。それは、音の大きさや明るさの感覚などについても同様です。

物理的に一定の音・振動や光・色の条件で実験しても、高齢者と若年者で反応や感覚が異なることがあります。それは、同じ環境条件でも、被験者群（人）の違いによって感覚に差があることを示します。また、同じ被験者群（人）でも、環境条件の違いに変化があれば、その要素が人の感覚に影響を与えていることを説明できます。

ここで適切な評価を行うためには、できるだけ多くの被験者を用いて実験を行うことが理想です。しかし、たとえ少人数の実験結果であっても、統計学的（数学的）な検定を行うことによって、実験結果の信憑性を判定することが可能です。評価したい建築空間の環境要素を上手くセレクトして実験を重ねていくと、物理的な環境データによって快適性を判断することや、複数の環境要素を考慮した総合的な環境性能評価を行うことが可能になります。（橋本修 准教授）

Q5 CASBEEやLEEDといった環境性能評価システムによる高性能が求められる時代になりましたが、それらはどのようなものですか？ また、高性能の建築物はどのようなものでしょうか？

A5

「CASBEE」(Comprehensive Assessment System for Built Environment Efficiency)とは、建築物の環境性能を評価し、ランク付けするシステムです。音環境や光・視環境、換気性能など、住み心地に大きく関わる要素、ランニングコストの決め手となる冷暖房効率などは、建築物の価値として求められます。評価結果は「S」「A」「B+」「B-」「C」の5ランクで示されます。

「LEED」(Leadership in Energy and Environmental Design)とは、米国グリーンビルディング協会によって開発され、運用を行っている建物と敷地利用に関する環境性能評価システムです。省エネと環境に配慮した建物・敷地利用を先導するシステムとされ、世界的に採用が進められており、米国で最も利用されているサステナブル建築の格付けシステムです。得点に応じて、上からプラチナ、ゴールド、シルバー、サーティファイドの4つのレベルで評価されます。

すなわち、それぞれの環境性能評価システムの高性能の建築物は、環境負荷が少なく、省エネであり、室内の快適性も高い建物であると言えるでしょう。(阪本一生 助手) ■



Q6 建築環境や都市環境に関わる紛争や訴訟はありますか？ その中で、建築を専門とする私たちは、 どのような対応をしていく必要があるのでしょうか？

A6

建築や都市における環境関係の紛争や訴訟は非常に多くなってきている印象があります。建築関連では、断熱性能不足による結露やカビ発生の問題、換気量や換気方式の不適切による室内空気質の汚染の問題、外部や他住戸からの透過音による精神的影響や睡眠への影響の問題など、都市レベルでは、街区の再開発に起因する日照障害やプライバシー侵害の問題、高速道路や建設工事などによる周辺地域の騒音被害、排気ガスによる空気汚染の問題などが特に挙げられます。これらの実問題に対して、建築学科では、環境工学、建築設備の設置科目において、ほとんどの要因を対象とした判断や対策方法に関する授業が行われているので、基本的理論や知識についてぜひとも修得し、将来の同様な紛争問題の未然防止や早期解決に役立てていただきたいです。

世の中は、地球レベルでの環境制御、特に温暖化防止のための方向に規制や基準の整備が動いています。しかし、建築の専門分野を専攻する私たちには、まず品質の高い建築物の創造が求められ、それを確保しつつ環境負荷を低減する方法を導入していくことが必要とされています。CASBEEの評価尺度に導入されているように、建築性能と環境負荷の比率が問題なのであり、周辺環境への負荷量の低減化を考へつつ建築性能を高めていく方向が、今後の進むべき考え方でしょう。建築性能、すなわち、そこに居住する人々の満足度(快適性)向上のために、現状における実建築物による紛争や訴訟事件の内容を吟味し、紛争などの問題の発生しない建築物の設計・建設を実現すべきなのです。(井上勝夫 特任教授) ■

Q7 どのような建築物や都市も災害時の対応は欠かせないと思います。 平常時の屋内環境を整えることは、 災害時にどのように役立つのでしょうか？

A7

冬期に屋内の温熱環境を整えるには、建築物の断熱性能を高めることが重要ですが、その向上は、災害時における温熱環境の維持にも役立ちます。2011年3月の東日本大震災では、東北地方を中心に電気やガスが途絶したため、しばらく暖房ができなくなってしまった住宅が多くありました。3月といても、外気温は0度近くまで下がることもありますから、暖房がなければ、たちまち住宅内の温度が低下し、生活できなくなってしまいます。しかし、断熱性能を高めた住宅では、数日間にわたって暖房器具を運転しなくても、住宅内の温度が15度程度に保たれ、厚着をすれば住宅内で凍えることがなかったようです。最近では、避難所となる地域の学校の体育館でも断熱化がはじまっているようですし、災害時のことを考えると、建築物の断熱性能を高めることが重要であると言えるでしょう。(井口雅登 助教) ㊦



Q8 建築学科が入っている駿河台校舎5号館の エアコンの最適な設定方法を教えてください。

A8

5号館には、冷暖房用のマルチエアコンが設置されています。たとえば、577A室のエアコンの能力は、冷房：7.1kW、暖房：8.0kWですが、これは家庭用という23畳用のエアコンの能力に相当します。研究室には、パソコンやコピー機などが設置されるので、大きめのエアコンが選定されているようですが、夏でも室内負荷が小さい場合は、「エアコンをつけると寒い！ 消すと暑い！」となってしまうこともあるようです。また、エアコンの温度は、部屋の入口近くのリモコン内臓の温度計で制御されているので、部屋の奥の温度が下がっても、室の入口付近まで温度が下がらないと、「入口付近は暑い、奥は寒い」ということにもなってしまいます。設定が難しい場合は、気流を和らげるルーバーを付けたり、研究室の扉を開けて空気の循環を工夫したりすると、以上のような問題を軽減することもできるようです。(井口雅登 助教) ㊦

Q9 これからの地球環境のためには、 どのような建築が必要になるのでしょうか？

A9

古くから日本の住宅は、自然の風など気候風土を利用し、先人の知恵を活かした快適な住まいを工夫してきました。地形や緑など建物の周囲の環境を工夫することにより、気候のデザインが可能となります。風の流れや、日差しの向き、周辺の木を活かした工夫など、伝統から学ぶ知恵が沢山あるのです。

2011年3月11日の東日本大震災による電力需給の逼迫から、多くのみなさんが計画停電を経験しました。その後も地球規模で相次ぐ地震や自然災害は、もはや“地球クライシス”と称されています。ゲリラ豪雨や地震、雷害など、あげればいとまがない大惨事から身を守る知恵を身に付け、個人の枠を脱し、市区町村、県、国レベルで、日頃からシミュレーションに基づく非難訓練や備蓄、生き延びるための野草研究に至るまで、もはや環境問題を避けてとおることはできません。

これからは、地球環境を見据え、環境との親和性を図り、さらにエネルギー自立循環を意図したパッシブデザイン+アクティブデザインをいかにマネージメントしていくかが鍵となるでしょう。(吉野泰子 短大教授) ㊦

学年を越えた設計課題の総合講評会 「スーパージュリー」、今年は6つの賞を選出!

text= 堀切梨奈子 助手

10月3日(月)～8日(土)、建築学科による「NU建築週間」が開催され、設計課題優秀作品の展示、スーパージュリー、研究室の活動や雰囲気を紹介するオープンラボが行われました。ここでは、総合講評会であるスーパージュリーの様子をレポートします。スーパージュリーとは、学部2年生から4年生までの優秀作品15点のプレゼンテーション及び講評を、ゲストクリティックを招いて行う年に1度のイベントです。学年や課題の垣根を超え、2016年度建築学科優秀作品が決定します。講評会後は、授賞式を兼ねた懇親会が行われ、今年是最優秀賞と優秀賞が各1点、ゲストクリティック3名とモデレーターの名前が付けられた賞が各1点、合計6つの賞が選出されました。

ゲストプレゼンテーション

今年のゲストクリティックは、日笠直彦さん(建築家/日笠建築設計事務所主宰)、西澤徹夫さん(建築家/西澤徹夫建築事務所主宰)、連勇太郎さん(建築家/モクチン企画代表理事)。モデレーターは佐藤光彦教授。ゲストの方々には、自己紹介を兼ねたミニレクチャーを行っていただきました。

連さんが取り組む「モクチンレシピ」は、木造賃貸住宅(=モクチン)を活用するアイデア(=レシピ)をウェブ上で提供し、使い手が複数のレシピを組み合わせることによりモクチンが持つ空間的問題の解決を提案するもので、既存建物の新陳代謝の仕組みを考えるプロジェクトです。

西澤さんが紹介して下さった最新作は、一本足のラーメン構造が印象的な住宅。敷地と前面道路の高低差を活かしながら、周辺とさまざまな距離をつくり出す一方、道路と反対側に面する山との関係を住民が自らつくり出すという設計者と住民のコラボレーションともとれる作品でした。

日笠さんは、これまでに手掛けられた作品を一挙に紹介。いずれも「白い壁」「開口部」「距離の取り方」という3つの手法を挟むことで、さまざまな角度からフォーカスを合わせた空間を生み出していくものでした。

3名のゲストのレクチャーからは、それぞれが向き合いながら編んでいった、建築の多様性をうかがい知ることができました。



連さんによるレクチャー風景。



最優秀賞は松田麻未さん。規模、プログラムなど複雑な課題に対し、思い描いたことをていねいに解いたことを評価された。



優秀賞は中崎佑香さん。「気持ち良い空間をつくり出している。身体スケールを超えた都市的なものの扱い方が今後の課題」と西澤さん。



連勇太郎賞は荒井聖己くん。作品として改善すべき点はあるものの、何十年か後の建築を考える姿勢を評価された。

【出品作品一覧】

◆2年前期 建築設計II | 第1課題「サードプレイス」
砂古口真帆「Machi-Archi」
中野萌子「十字の柱のもとで」(★日笠直彦賞)
中崎佑香「あるいて、とどまる」
松田愛夏「駿河台mixjuice」

◆2年前期 建築設計II | 第2課題「住宅」
荒井聖己「そこに有り続ける」(★連勇太郎賞)
砂古口真帆「住まうを広げる家」(★西澤徹夫賞)
土屋菜希「集う家」
中崎佑香「谷中の私のふたつの意識」(☆優秀賞)

◆3年前期 建築設計IV「南青山コンプレックス」
伊勢萌乃「ゲニウス・ロキ」
力武瑞穂「表層への介入」(★佐藤光彦賞)
松田麻未「ArtifoundLex」(☆最優秀賞)
山田香奈恵「集い、重なる小道」

◆4年前期 建築設計VI
今村ユニット 増田俊「にぎわい溢れ出す『歓学坂』」
井出ユニット 石出祐介「九段会館改修計画」
関谷ユニット 中谷遼「水際都市・神田川広化計画」



日埜直彦賞は中野萌子さん。「絶対的評価の難しい課題だが、感覚的に気持ち良さをイメージできた」と日埜さん。



西澤徹夫賞は砂古口真帆さん。「システムとその意味を曖昧にするのが良い。信じる道を突き進んでほしい」と西澤さん。



佐藤光彦賞は力武瑞穂さん。図面や模型から伝わる設計力の高さが評価され、その力を意識的に操ることを期待された。



連さん、日埜さんと出品者の伊勢萌乃さん。懇親会ではゲストや先生方と作品について改めて議論する風景が見られた。



1号館CSTギャラリーには、夏のワークショップで制作された1/1スケールの作品も展示された。

💡 講評会+総評コメント

「2、3年生は、寸法などの設計に用いる基本的なことが、ある程度は形にまで落とし込んでいました。大学に入ってすぐにはできないわけではないことが多い中、熱意とチャレンジの気持ちが見えました。」(日埜直彦)

「全体を通して、本当にリアリティを持っているかが気になりました。ただ課題としてやってしまっていないか。なぜ良いのか。本当にそう思っているか。時代のマジックワードを使っていないか。自分がやっているものに、もっと疑いを持つべきだと思います。」(西澤徹夫)

「建築の持つ本質的なものは変わっていないかもしれませんが、建築を取り巻く社会環境はどんどん変化しています。そんな中で、オリジナルの問題意識や価値観を信じて、そういうものを獲得するために課題を使ってほしいです。」(連勇太郎)

「質疑における議論のズレの部分をどう意識するかで、設計する能力に変化が出ます。自分の主張したいことを言うだけでなく、ズレの部分をより意識化してください。」(佐藤光彦)

✎ 夢のような24日間の旅

text=伊勢萌乃（3年）

授業や本、テレビで見ていたヨーロッパ建築が、憧れの街が、今、まさに目の前に広がっている！「近代建築の揺籃期から現代までの旅」と題し、ヨーロッパ8カ国を巡る24日間の旅は、私にとって、おとぎ話の中に迷い込んだ気分だった。

最初に訪れたのは、スペインのバルセロナ。情熱という言葉がピッタリの暑くカラッとした快晴が、私たちを出迎えてくれた。サグラダ・ファミリア大聖堂をはじめとして、カサ・ミラ、カサ・パトリヨなどを見学。ガウディの不思議な世界観に飲み込まれた。

次に訪れたのは、水の都イタリアのヴェネチア。リアルト橋の袂で食べたカルボナーラの味は一生忘れられない。20年間生きてきた中で、一番高いランチだった。2年に一度行われるヴェネチアビエンナーレ国際建築展にも行った。もちろん、日本館も面白かったが、多くの国が難民問題を取り上げていたことに目を奪われた。言葉も違えば宗教も考え方も違う。教育の仕方だって違う。何が正義で、何が悪なのか、そんなことを考えさせられる内容だった。

3つ目に訪れたオーストリアのウィーンで一番印象的だったのは、ウィーン郵便貯金局である。頑丈そうで、古典的な外観とは裏腹に、鉄骨とガラスでつくられた内部は、優しい光に包まれた、近代を象徴する美しい空間だった。



ヘルツォーク&ド・ムーロン設計のヴィトラハウス

中世に迷い込んだかと思うほど美しい街並みと、黒ビールでチェコのプラハを思う存分堪能した後、ドイツとスイスをバスで行き来する生活が続いた。その中で一番印象的だったのが、ヴィトラ・デザイン・ミュージアムである。ヘルツォーク&ド・ムーロンのヴィトラハウスの内部は、屋根型の印象通り、まるで自分の家にいるかのような空間が広がっていて、それぞれの家具の良さを存分に引き出していた。その他にも、ザハの消防署、シザの工場施設、ゲーリーのミュージアム、私の大好きな椅子と建築家の作品をまとめて見られる、まさに夢の世界が広がっていた場所であった。

次にフランスのリヨンとパリを訪れた。夜になると、運河の近くにたくさんの人々が集まり、お酒を飲んだり、ダンスをしたり、マーチングバンドの練習をしたり、思い思いの楽しみ方で眠らない夜の街を楽しんでいたのが印象的だった。アアルトのルイ・カレ邸とコルビュジエのサヴォア邸を同じ日に見学したことも、パリでの大きな出来事のひとつだ。この2つの建築を見て感じたことは「豊かさ」である。いままで近代建築は、技術が発展し、新しいものが増え、新しいデザインや手法を競い合うように発展してきたものだと思っていた。しかし、それ以前の問題に、人が幸せに暮らせるような空間とは、いったい何なのか。アアルトやコルビュジエをはじめ、近代建築の巨匠たちは、この「豊かさ」を追い求めてきたのだろうと感ずることができた。

最後に訪れたのは、イギリスのロンドン。しとしとと雨が降っていて、もうすぐ旅が終わってしまうという気持ちと重なり、悲しくなった。ロンドンの自由行動では、ロイズ・オブ・ロンドンやシティ・ホールを見たり、ショッピングをしながら街並みを楽しんだ。リージェント・ストリートでは外壁が同じように見え、目的のお店になかなかたどり着けなく途方に暮れたことも、今となっては良い思い出である。

行った国8カ国、見た建築80件以上、触れた言語8カ国語、お金4種類、スーパーのおばちゃん、フィッシュ・アンド・チップス店のイケメン店員、道を教えてくれたおじさん、出会った人は数え切れないほどたくさん。一瞬一瞬が新鮮で考えさせられ、何よりずっと見たかった建築をたくさん見て、触れて、本当に毎日が楽しかった。ここで感じたものをこれからも大切にしていきたい。私の夢への旅は、まだまだはじまったばかりである。



ル・コルビュジエ設計、サヴォア邸にて記念撮影

✎ たくさんの“物の見方、感じ方” を覚えてくれた時間

text=長谷川謙人（3年）

この3週間強に及ぶヨーロッパ8カ国の旅は、僕にとって新しい物の見方を与えてくれた旅だったというのが、帰国後しばらく経った今の感想です。これが僕にとっては初めてのヨーロッパ渡航だったので、出発前にはこれからの行動一つひとつが、自分の中の“その国のイメージ”をつくっていくのだろうと、とてもドキドキしていました。

研修は大まかに全員で見学する団体研修と、個人で好きな場所を散策して回れる自由研修の2つに分かれていて、両方に良い点と不自由な点があり、一概には判断できないのですが、僕はどちらかというと自由研修の時間が有意義に感じられました。団体研修のほうは、ガイドや建築物の関係者などが解説をしてくださり、教科書や写真ではわからない、その建築のさまざまなディテールや建てられた歴史、壁や柱に表れている当時の施工技術と補修、改修の跡など、いくら自分たちが注目していても、知らなければ読み取れない情報を得ることができました。そのため、各都市、各建築物を訪れるたびに、知識量、観察眼、建築家ごとの特徴付けと理解度が増していく感覚があり、知識の吸収という意味においては、団体研修の時間はとても良いものでした。

一方の自由研修では、「行く場所」が自分次第なのと同時に、「良し悪しの判断」も自分次第であることが、僕にとっては大きな要素だったと思っています。見に行く最初の理由こそ、建築家のネームバリューやファサードの格好良さ、催されているイベントで決めてはいましたが、実際目にした際の主観的意見を、一緒に行動している友達と率直にぶつけ合い、自分なりの解釈と良い点悪い点の発見を、自分基準で大量に行う作業は、“学習”とは違う“感性の成長”をととてもさせてくれたと思います。その解釈の正解はわからないままでも、とにかく目についた物について想像を膨らませ、何が格好良く思えて、何が違うかを自分の感性を見つめ直しながら他人と言い合うことが、建築を見る目を肥やすことにつながり、物の感じ方の引き出しを増やしてくれました。各都市での食事や公共施設の利用においても、同様に常にそういったディスカッションがあり、さまざまな分野にお



オルサー美術館

いて、自分の価値基準をつくる材料にできたと思っています。

あと、完全に僕基準ですが、どの建築もいろんな意味で想像の上を行っていた気がします。街なかの結構普通な噴水公園の端っこにあるバルセロナ・パヴィリオン、エンカンツ蚤の市をはじめとする“地震と無縁な地域のもの凄いキャンチレバー”、街なかとは思えぬ広すぎるベルヴェデーレ宮殿、リヨンのオレンジ・キューブとユーロニュース・センターの外皮の色の派手さとちゃっさ、ROLEX ラーニングセンターは床の傾斜がやたらキツく、「床の隆起で空間を仕切るタイプ」の設計はこれが限界だと身体が教えてくれました。どれも実際に行かないと感じ取れない想像の裏切られ方をしました。しかし、そういった問題点を見付けたり、ツッコミを入れたり、中に入って後悔してみたりしたことで、知識や情報を聞くだけでなく、表現して共有することができたのは、間違いなく貴重で大切な経験であったと思います。

監

●日程：8月16日（火）～9月8日（木）

●旅行行程：【日本】羽田→【スペイン】バルセロナ→【イタリア】ヴェネチア→【オーストリア】ウィーン→ブラハ→【ドイツ】ミュンヘン→ホーエンシュヴァンガウ→【オーストリア】ブレゲンツ→【スイス】クール→ヴァルス→スニヴィッツ→チューリッヒ→【ドイツ】ヴァイル・アム・ライン→【スイス】リーエン→【フランス】ロンシャン→【スイス】ローザヌ→コロソー→ジュネーブ→【フランス】エヴー→リヨン→パリ→アミアン→ランス→リール→【イギリス】ロンドン→オックスフォード→コベントリー→レスター→ケンブリッジ→レッチワース→ロンドン→【日本】羽田

●参加者：【2年】山地大樹【3年】赤根匠、安藤愛観、伊勢萌乃、岩浅郁哉、大岩郁穂、大木拓也、大野啓介、岡栄佑、小川舞、河村佳祐、古賀まつり、小林みのり、内田春菜、高橋樹、高橋美乃理、田村隼人、長谷川謙人、原碧、東紀史、福寿谷宗一郎、藤井冨佳、堀内ひかる、本田陽子、本田竜一、増田靖、松田麻未、松本歩、宮上航、森達也、矢ヶ崎拓人、山口裕也、行近拓海、吉本尚世、渡部沙也加【M2】小関真子、中辻千尋

●引率教員：佐藤光彦 教授、古橋剛 教授



ヴェネチア

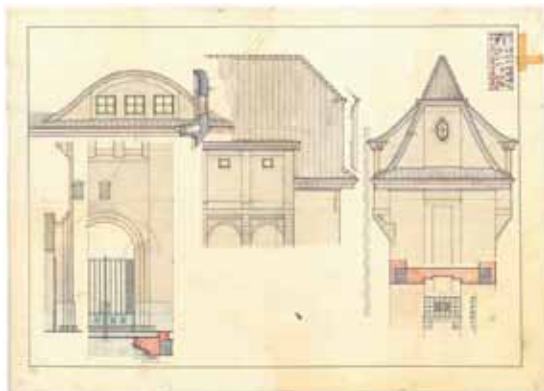
時代を越えるメッセージ

—「吉田鉄郎没後60周年記念展」をふり返って

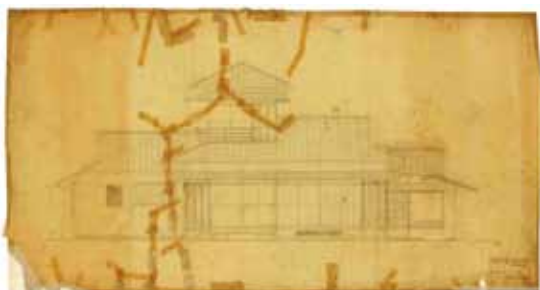
text= 田所辰之助 教授

去る10月29日(土)から11月26日(土)の1ヵ月間にわたり、理工学部お茶の水校舎1階ロビーにて「吉田鉄郎没後60周年記念展」が開催された。吉田鉄郎は、東京・大阪の両中央郵便局や馬場氏牛込邸(現最高裁判所長官公邸、2014年重要文化財指定)の設計で知られ、戦前の日本にあって通信省を舞台にモダニズムの建築を大胆に試み、その名が広く語り継がれている建築家である。戦後は1946年より本学教授として教鞭をとり、脳腫瘍を発病するまでの3年半ほどの短い期間であったが、本学部建築学科の教育に大きく尽力され、その礎を築いた。残された図面など吉田鉄郎に関する資料はいま、NTTファシリティーズ、郵政博物館に保管されている。また、晩年の吉田の活動をサポートし、吉田鉄郎研究に注力された故矢作英雄氏(元日本大学生産工学部助教授)に託されていた資料が、文化庁国立近現代建築資料館に預けられている。今回はこれら関連機関から21作品、計75点の図面をお借りすることができ、展示することになった。また、11月1日(火)には川向正人先生(東京理科大学名誉教授)、観音克平先生(郵政建築研究所)をお招きし、1号館CSTホールにてシンポジウム「建築家・吉田鉄郎の足跡とその今日的意義—建築のスタンダードを求めて」を開催した。

展示された図面はいずれも、吉田の主要作品について詳細を伝える貴重なもので、初出の図面も数多く含まれ見応えがあった。学生時代の課題作品や、美濃紙に描かれた初期の代表作、京都中央電話



京都中央電話局新上分局(1924年)各部詳細図
(所蔵:株式会社NTTファシリティーズ)



馬場氏熱海別邸(1940年)南立面図
(所蔵:株式会社NTTファシリティーズ)

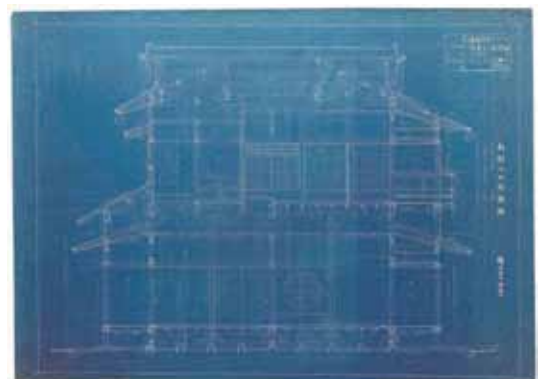


会場風景

局新上分局の図面は美しく着彩され、はっと息をのむほどであった。また吉田は、通信省の仕事とは別に、郷里富山の実業家馬場氏のために木造による一連の住宅を手掛けている。いずれも初公開となった、牛込邸、那須山荘、馬場清彦邸、熱海別邸の細部まで精細に描かれた各図からは、日本の伝統建築の作法とその美意識へ向けられていった吉田の眼差しが伝わってくる。通信省で花開くモダニズムの建築群も、実はこうした伝統への意識に支えられていたことが感じられるようだった。

吉田は晩年「建築意匠と自抑性」と題した文章を記し、日本の伝統を「自然的なもの、清純なもの、自抑なもの、日常的なもの」と表現した。そして、それが現代建築においても「真の意味における積極性」を持っていると述べている。「自抑性」とはわかりにくい言葉だが、単に伝統への意識ということを超えて、建築を自己表現の対象ととらえず、むしろ自己を抑制しながら設計する姿勢を吉田は問おうとしていたように思える。このような問題意識は吉田の戦後の作品にも垣間見られるが、残念ながら病に倒れ、実現したものは限られる。60年を経たいま、建築のあり方はますます混迷を深めているように見える。なおさらに、時代を越えた、吉田のこうしたメッセージに耳を傾けるべき時期を迎えているのかもしれない。残された関連資料の更なる分析が望まれる所以である。

最後となりましたが、今回の企画に際し、図面の借用を快くご許可いただきました関連機関、また故矢作英雄氏の御遺族に対し、この場を借りて改めて御礼と感謝の念を表します。



馬場氏牛込邸(1928年)矩計図
(所蔵:個人蔵)

学生がプロOBに勝利!

「ストラクチュアル・アート」デザインコンペ

text= 今村雅樹 教授

桜 門建築会の新企画としてはじまった「桜建デザイン・コンクール」は、学生からプロのOBまでを対象に幅を広げ、交流試合形式をとった。「ストラクチュアル・アート」をテーマとし、日大出身の若手の建築家と構造家を中心に総勢12名が審査に当たり、「多様なデザイン価値を評価」する方式で行われた。

応募総数は76作品（ほとんどは数名で1チームを構成し応募）、1次審査はA3サイズのプレゼンボードと模型で行われ、10月29日（土）の最終審査では、選ばれた入選作品がリアルサイズで製作され、プレゼンテーションが行われた。その結果、「グランプリ」が1作品選ばれ、3作品が「優秀賞」に輝いた。

グランプリは、短大出身の日大芸術学部と理工建築女子2名で提案した作品「木漏れ日のルーフ」であった。優秀賞3作品には、竹中工務店東京「ときのゆらぎ」と大成建設「flicker」の2作品が選ばれる中、生産工学部学生作品「Visualization of feelings」も選ばれ、学生とプロがアイデアの面白さを競い合う、質の高いコンクールとなった。また、各審査員賞12作品と桜建会賞1作品も入選作品以外から選ばれ、それぞれがキラリと光る可能性を見せてくれた。

デザインの傾向からは、ゆらゆらと動きを持つ構造形式の提案が多く見られ、そのために考えつくされたアイデアが秀逸であった。これは少し前の「ゆらぎ」イメージではなく、リアルなゆらゆら感をどのように出すのがデザインされており、触って楽しめる構造体は、ある意味インタラクティブ・アートであり、新しい「ストラクチュアル・アート」の世界であった。

【審査員長】今村雅樹（建築家／建築学科教授）【審査員】内村綾乃（建築家／A studio）、大野博史（構造家／オーノJAPAN）、小西泰孝（構造家／小西泰孝建築構造設計）、斎藤公男（構造家／日本大学桜門建築会会長）、多田脩二（構造家／千葉工業大学准教授）、田村恵子（構造家／金箱構造設計事務所）、永井祐季（構造家／佐々木睦朗構造計画研究所）、鍋島千恵（建築家／TNA）、古澤大輔（建築家／日建築学科助教）、山崎誠子（ランドスケープデザイナー／短大准教授）、与那嶺仁志（構造家／ARUP）



グランプリ「木漏れ日のルーフ」



優秀賞「flicker」

優秀賞「ときのゆらぎ」



最終審査風景



優秀賞「Visualization of feelings」

#31 7月27日 (水)



Guest

長島 確さん


(ドラマトゥルク・翻訳家)

text=山本美咲 (4年 佐藤慎也研)

今

回のオウケンカフェでは、ドラマトゥルク・翻訳家の長島 確さんにゲストに来ていただきました。階段、廊下、椅子など、そこでの行動や出来事は場所に埋め込まれているというお話は、とても興味深いものでした。これをプロジェクトとして表現したものが「アトレウス家プロジェクト」です。新築された家を会場に上演された「アトレウス家の新築」の映像の中で、この家に住むはずではないギリシャ悲劇に出てくる家族が、この家にこのように

住みたい、ということ語り合っていて、そこで生じた違和感によって、映像を観る前と観た後では、家の見方が変化させられていたことを思い出しました。レクチャーでは、建築と演劇を対応させている場面が多々あり、この考えが、「アトレウス家」のような、建築と演劇の新たな可能性を持ったものへとつながっているのだろうと感じました。

また、議論の途中に長島さんがおっしゃっていた、建築(住宅)の「ライフスタイルへの提案のおしつけがましさ」という言葉が心に残っています。提案とは、ある種の命令のようなものであり、生活をただ窮屈なものへと変えてしまう場合もあるということに気づかされました。今回のオウケンカフェに参加し、演劇の面白さに触れることができました。有意義な時間をありがとうございました。 

#32 9月28日 (水)



Guest

宮崎 晃吉さん


(建築家・HAGI STUDIO)

text=小嶋玲香 (3年)

H

AGISO宮崎さんのレクチャーを聞いて。まず思ったことは、この谷中HAGISOとその周辺のプロジェクトは、単なるリノベーションではなく、建築が小さな社会を再編成している、ということ。リノベーションは単なる建築の再構築ではない。建築の持つ力が、小さな社会を動かした。建築とは、そもそもそのような社会的な力を持つはずであるが、リノベーションというもともとあった建物を利用することで、社会への影響力がより大きく出たのだと感じた。

他にも、学生の設計課題と1/1のリアルとの差の話、建築学生は経済のことや社会のことを大学では学ばないこと、リスクの話、大人の本気には勝てないということ、行政サービスのシステム崩壊とボトムアップからのまちづくりに関すること、価値を救いあげる、結局つくるのは人の想いだ……などなど、普段からもやもやと感じていることの話が多く、興味深い時間が過ぎた。

一方で、どこかで客観視している私がいた。それはきっと、漠然と私たちの世代は、この次をやらなければいけないと思っているからかもしれない。もしかしたら、宮崎さんが話したように「今は手を動かしている状態」であり、次は頭を動かし、何かを発見していく段階なのかもしれない。価値を見直し、リノベーションで社会をつくる。では、その次はどう進めばよいのだろう。 

#33 10月26日 (水)



Guest

山道 拓人さん

(建築家・ツバメアーキテツ)



Guest

千葉 元生さん

(建築家・ツバメアーキテツ)


text=渡辺拓也 (M1 古澤研)

空

間構成を行う「デザイン」と、社会構築を行う「ラボ」の2部門を掲げ活動しているツバメアーキテツ。設計プロセスにおいても、都市と建築、ハードとソフト、抽象と具体といった2者を設定し、双方を並走させながら最終的にすり合わせる手法を取っており、「デザイン」と「ラボ」が組織として積極的に機能

していることがうかがえた。

今回紹介されたプロジェクトで印象的だったのが、「荻窪家族プロジェクト」での「事前リノベーション」。建物の完成前に、さまざまな職能・世代の人とワークショップを行い、工事中にリノベーションを行うこのプロジェクトは、ユーザーを具体的に設定し、設計の解像度を極限まで高めている。それにより、特定少数のアクティビティを最大限に促進させ、その影響が不特定多数に作用するというものであり、これまでにない場の設え方として非常に興味深かった。

ツバメアーキテツが掲げる、歴史・過去に寄り添った設計理念や、建築基準法に関与しないエレメント(建具)に着目したフレキシブルな空間構成などは、いずれも建築の新たな可能性を見出そうとするものであり、今後の建築家のあり方にまで発展する非常に有意義なレクチャーであった。 

News & Topics

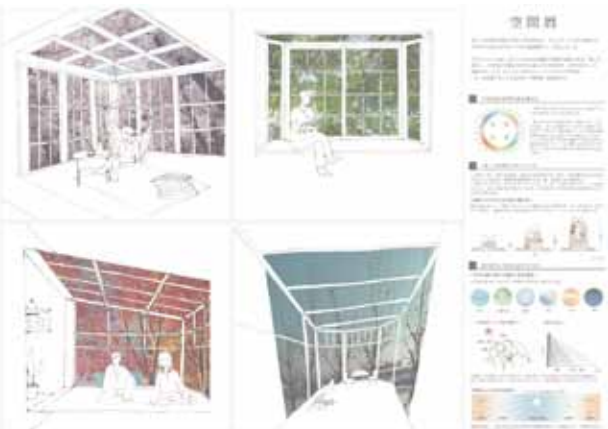
第32回2016釜山国際建築大展において建築学専攻1年の野下啓太君が銅賞を受賞

「第32回2016釜山国際建築大展(国際アイデアコンペティション)」(主催: 社団法人韓国建築家協会釜山建築家会、公益社団法人日本建築家協会近畿支部、天津市建築学会)において、建築学専攻1年の野下啓太君(今村研)の作品「Dark Inheritance」が「銅賞」を受賞した。



第8回ハーフェレ学生デザインコンペティション2016において建築学専攻1年の太田みづきさんが五十嵐賞を受賞

「第8回ハーフェレ学生デザインコンペティション2016」(主催: 株式会社ハーフェレジャパン)において、建築学専攻1年の太田みづきさん(今村研)の作品「空間暦」が「五十嵐賞」(入選)を受賞した。テーマは「Sexy Sunroom」。応募総数139点の中から、最優秀賞1点、優秀賞1点に次ぐ入選4点に選ばれた。



古澤大輔助教がデザイナーを務める「コミュニティステーション東小金井」がグッドデザイン特別賞(地域づくり)を受賞

古澤大輔助教がデザイナー(株式会社リライトと協働)を務める建築作品「コミュニティステーション東小金井」が、「2016年度グッドデザイン賞」(主催: 公益財団法人日本デザイン振興会)の「グッドデザイン特別賞(地域づくり)」を受賞した。これは、中央線連続立体交差事業によって生まれた高架下スペースに開業した地域共生型商業施設で、建物は海洋コンテナのモジュールで統一した20ft型コンテナ40個で構成され、ここに、物販、飲食店、フリーペーパーライブラリ、イベントスペースなどが設置されている。

第12回地盤改良シンポジウムにおいて建築学専攻2年の中浜悠史君が優秀発表者賞を受賞

「第12回地盤改良シンポジウム」(主催: 公益社団法人日本材料学会)において、建築学専攻2年の中浜悠史君(地盤基礎研)が、論文題名「セメント安定処理粘土の初期せん断弾性係数の評価」によって「優秀発表者賞」を受賞した。このシンポジウムは、2年に1回開催され、応募論文には査読があり、今回の発表件数は81件であった。この賞は、35歳未満の若手研究者の口頭発表を対象とするものであり、今回は8名が選ばれた。

「千代田区を舞台にした学生設計展2016」において建築学科4年の3作品が展示

「千代田区を舞台にした学生設計展2016」(主催: 公益社団法人日本建築家協会千代田地域会、後援: 千代田区)が11月3日～5日まで千代田区役所区民ホールにて開催され、平間裕大君(今村研)の「27の風景の記述」、横山大貴君(同)の「Urban synapse 古書店街を綴る」、藤井将大君(佐藤光彦研)の「立体参道は街を巡る」(いずれも建築学科4年)が展示された。これは、千代田区内に敷地を選んだ大学生の卒業設計・課題設計から優秀作品の図面・模型が展示された。本学から出展した3名は、日本建築家協会から「学生優秀賞」を授与された。

山中新太郎准教授らが下田市の建物調査を実施

9月5日～7日に静岡県下田市にて、山中新太郎准教授と山中研究室は、山中准教授を中心に組織された「下田まち遺産調査委員会」として、東京大学、筑波大学の学生など市内外のボランティアとともに、地元産の伊豆石でつくられた建物や、なまこ壁の民家など1,300件の建物などの外観悉皆調査を実施した。その様子は、地元テレビ・新聞などの多くのメディアに取り上げられた。山中准教授は同様の調査を2006年にも行っており、152件の「下田まち遺産」の認定・登録に結びついた。今後は、前回と今回の調査を比較した分析も行われる。

BOOK & MAGAZINE

『集合住宅の音に関する紛争予防の基礎知識』

井上勝夫特任教授が編集委員会の主査を務めた『集合住宅の音に関する紛争予防の基礎知識』(日本建築学会編、日本建築学会)が刊行された。執筆には、井上特任教授のほか、富田隆太准教授、本学OBが多数関わっている。本書は、集合住宅内の音環境に関する苦情やトラブルの未然防止、さらには紛争に至ってしまった場合の早期解決に資することを目的として執筆されている。

[連載] 私と建築 vol.86

それぞれの 人間に合った努力を

text=池田耕一 特任教授

私の研究キャリアは、あまり建築とは関わりがないというか、「建築から逃げ回っている」というほうが当たっているかもしれません。建築をこよなく愛しておられる先生の一部の方には、気を悪くされる方がおられるのではないかと心配しております。そもそも私は、建築の「け」の字も知らず、その素養もないのに、大学進学時に当時私がいた付属高校から進学する場合、理系の最難関学科であったというだけで建築学科に入り、建築設計が向いていないと思ひ込み、それ以来、建築というものから逃れることだけを考えて過ごしてきた人間です。そのために、最も性に合っていたのが建築環境工学で、その中の空気環境に関する研究を、大学院とその後就職した国立公衆衛生院（後の国立保健医療科学院、厚生労働省の教育研究機関）で、数十年にわたり実施してきました。特に、大学院時代は若かったこともあり、六本木にあった東大の生産技術研究所で、1年365日、朝10時から夜10時まで、ときには実験室に泊まり込むなどして、ほとんど休むことなく、建築物内外の空気環境問題に関する風洞実験に明け暮れていました。主な研究対象は、米軍グラントハイツ跡地（今の光ヶ丘団地）や池袋のサンシャインシティなどの風環境問題で、5年間で10数件の高層建築物などの風洞実験に関わりました。そして、公衆衛生院でも27歳で就職して以来30年以上にわたり、ひたすら室内の空気汚染問題に関する実験や実測をし続け、シックハウス対策や建築物衛生管理などの厚生労働省の建築衛生施策の策定に関わりました。そんな仕事ばかりで、建築の設計とは全く無縁の生活をしていたのです。かつて、井上勝夫先生のお師匠であられる木村翔先生からも、本学への就職のお誘いを受けたことがありましたが、その際は、私自身の建築に対するそれまでの関わり状況から、建築学科の教員として十分な勤めが果たせるかとの心配をして、断念したこともありました。



実験中の筆者

その後、井上先生のおかげでこちらにお世話になるようになり、設計・計画系をはじめとする各先生方の教育・研究活動を傍らから拝見させていただくにつれ、また、建築設備の授業も手がけるようになり、考え方も変わってきました。即ち、それまでは、「建築設計は才能が問題で、自分のような才能がないものはいくら努力しても無駄だ」というような考えを持っておりましたが、それは間違っているということがわかってきた気がします。もちろん、才能ある建築家の作品は素晴らしいものがあります。しかし、そこまでの偉業でなくとも、それぞれの人間の背丈に合った努力をすれば、それなりの業績は達成できるものであり、「できない」というのは、結局、「努力をしていない」ということに他ならないことが良くわかりました。

計画系の先生方は、教室会議が終わったあとも良くお集まりになって、教育や研究に関する相談をしておられますし、設計課題の締め切りが近づけば、夜遅くまで、学生の指導をしておられます。学生の方も、自主的に設計活動に取り組んでいるようで、必要に応じては、現地に出かけ、デザインサーベイなどを、先生と学生で実施しておられます。その師弟の交流から、今は大きくはなくとも、将来は、日本のレガシーのひとつとなるような作品を残す建築家となる可能性を秘めた、若い才能が育っていく様子が良くわかります。私も、建築から逃げることをばかり考えず、今の本学での師弟の交流のような設計の勉強をまじめにやっておけば良かったと思っている次第です。少し遅かったようですが……。このような私を温かく迎えてくださった井上先生と、同僚としてお付き合いくださった建築学科の先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。 ■



大学院の授業の教科書
『室内空気汚染の原因と対策』



退官記念祝賀会での筆者

いけだ・こういち：1947年東京都生まれ。1970年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1975年東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程博士課程修了（工学博士）。1975年国立公衆衛生院建築衛生学部建築衛生計画室研究員。1980年同上主任研究員。1982年カナダ国立科学研究所建築研究部門研究協力員。1983年国立公衆衛生院建築衛生学部主任研究員。1989年同建築物衛生室長。1994年国立公衆衛生院建築衛生学部部长。1995年同教授。2000年東京大学生産技術研究所客員研究員、放射線医学総合研究所客員研究員。2002年国立保健医療科学院建築衛生部部长。2004年社団法人空気調和衛生工学会技術Fellow。2008年国立保健医療科学院建築物衛生部部长定年退職。2008年同研究員。2009年日本大学理工学部建築学科教授。2014年日本大学理工学部建築学科特任教授。

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

環境と設備の今

- ・ゼネコンの技術研究所を見学して text= 井口雅登 助教
- ・[座談会] 学生の中から見た環境と設備の今
- ・専門外の先生から環境・設備の先生へ素朴な疑問

14 [REPORT]

- 建築学科 NU 建築週間「スーパージュリー」
- 建築学科海外研修旅行2016
- 吉田鉄郎没後60周年記念展
- 桜建デザイン・コンクール2016
- オウケンカフェ #31, #32, #33

21 [NEWS & TOPICS]

- ・第32回2016釜山国際建築大展において建築学専攻1年の野下啓太君が銅賞を受賞
 - ・第8回ハーフェレ学生デザインコンペティション2016において建築学専攻1年の太田みづきさんが五十嵐賞を受賞
 - ・古澤大輔助教がデザイナーを務める「コミュニティステーション東小金井」がグッドデザイン特別賞（地域づくり）を受賞
 - ・第12回地盤改良シンポジウムにおいて建築学専攻2年の中浜悠史君が優秀発表者賞を受賞
 - ・「千代田区を舞台にした学生設計展2016」において建築学科4年の3作品が展示
 - ・山中新太郎准教授らが下田市の建物調査を実施
- ほか

22 [Architecture & Me]

- vol.86 それぞれに人間に合った努力を text= 池田耕一 特任教授

24 [EVENT REVIEW]

- mosakiのイベント巡礼 vol.20
- トラフ展 インサイド・アウト

SHUNKEN

2017 Jan. Vol.44 No.4

「駿建」

発行日：2017年1月16日

発行人：中田善久

編集委員：佐藤慎也・宇崎勝也・宮里直也・井口雅登・古澤大輔・堀切梨奈子・宮田敦典・
山崎誠子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼 vol.20

トラフ展 インサイド・アウト

会場：ギャラリー間
会期：2016年10月15日（土）～12月11日（日）五感に訴えかける都市計画。
これぞトラフワールド！

♥今回は、硬派なイメージのあるギャラリー間でトラフの個展っていうところが、なんか、時代を感じる。あ、別にトラフが軟派だって意味じゃないんだけど、なんというか、建築建築していないじゃない？

♣そうだね、確かに建物ばかりつくっているわけじゃないけれど、でもプロダクトから建物まで、どんなスケールの仕事であろうとも、常に建築家としての視座や哲学を携え続けているところが、トラフの建築家たる所以だよな。

♥建物の設計ではないことも建築行為であるっていう考え方はすごくよくわかるんだけど、それをギャラリー間という場が受け入れたことは、ちょっとしたエポックメイキングっていうか。現代の建築を象徴する事件のひとつだと思う。

♣わー、会場からして、他の建築家とは全然違うね。いい香りに包まれて、展示室いっぱいにつくられた大きなテーブルに、規模やジャンルを問わ

連載は、今回が最終回！ 5年間、ありがとうございました。
次号からは新連載がはじまります。



ず、トラフのさまざまな仕事が置かれている。まるで街並みみたいに、楽しげに。

♥見て！ その間を縫うようにして、ちっちゃな電車が走ってるよー。かわいいー！ この展示もそうだけど、トラフの作品って第一印象で、理屈抜きにワクワクした気持ちにさせてくれるんだよね。大事なことだよ、まずそこが好き。

♣2階展示室は映像……。しかも、あのおもちゃの電車からのビューが映っている！ 途中途中止まりながら、そこから見える作品の説明が加わって。映像の編集もバックで流れている音楽も、最高にハッピーだね。1階の展示が映像になって、音がついて。それらがひとつに統合された完成度といったら、他の建築家には真似のできないレベル。さまざまなジャンルの仕事に携わってきたト

ラフならではの。

♥トラフって自分たちのしていることを、小さな都市計画って呼んでいるよね。都市や建築に、さまざまな社会問題が絡んでいることは、十二分にわかっているはず。だけどその問題に対して、難しい顔してダイレクトに取組み合うのではなくて、まずそこに生きる私たちが、世界をどんな目で見るかっていうことが、トラフのイタズラみたいな作品が、問うてくれる。

♣現状の建築や都市を肯定も否定もしないで、目線や思考回路を変えていくこと。そこからリアルな社会に何かが出るとような、希望がはじまっているんだって。トラフはそんな、ひとりひとりのチカラを信じているんだね！

Recommend | 2017年1月 - 3月

【1】「デザインの解剖展 身近なものから世界を見る方法」

| 21_21 DESIGN SIGHT | 会期：2016年10月14日（金）～2017年1月22日（日）

グラフィックデザイナーの佐藤卓が2001年より取り組んでいるプロジェクトで、身近な製品を「デザインの視点」で解剖し、各製品の成り立ちを徹底して検証する。今回は、これまでの成果と合わせて、新たに「株式会社 明治」の5つの製品に着目する。製品を取り巻く世界はもちろん、社会、暮らしとデザインの関係について、さらにはデザインの役割や可能性について、改めて深く考察する。

【2】「連続講演会 建築家が創造する建築文化の未来ー建築模型、その価値と可能性ー」

| 建築倉庫 | 会期：2017年1月～3月 ※不定期

昨年、東品川の寺田倉庫1階にオープンした、収蔵する建築模型を展示するギャラリー「建築倉庫」では、定期的に講演会を開催している。設計される建築物とその模型との関係を紐解くトークシリーズに足を運んでみよう。第7回1月25日（水）原田真宏、原田麻魚（MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO）、第8回2月22日（水）加茂紀和子、曾我部昌史、竹内昌義、マニエル・タルディッツ（みかんぐみ）、第9回3月8日（水）槻橋修（ティーハウス建築設計事務所）ほか。詳細はホームページをチェックしてみよう。

【3】「堀部安嗣展 建築の居場所」

| TOTOギャラリー・間 | 会期：2017年1月20日（金）～3月19日（日）

建築家・堀部安嗣の建築の真髄を伝えるべく、代表作である「竹林寺納骨堂」や「阿佐ヶ谷の書庫」を含む14作品による5編の短編映画を制作し、会場で上映する。施主へのインタビューやそこを訪れる人びとの様子、周囲の環境との関わりなど、個々の物語を通して、堀部の建築を細解くもの。また会場には、日々作品が生み出される事務所のインテリアが再現され、建築が生まれるまでの過程をスタディ模型から愛用の設計道具、影響を受けた建築などを通して紹介する。

【編集後記】

建築学科に入って学びはじめると、なんだか意匠設計が花形のように、ついつい思われがちなのですが、本当はそんなことはありません。歴史だって、材料だって、構造だって、そして今回取り上げた環境や設備だって、それぞれの世界には奥深く楽しい世界がありつつ、それらは常に社会のさまざまな部分で大きな役割を果たしています。ただ、受け身で授業を受けているだけでは、その面白さをつかみ取るのは難しい。しかし、これはどの分野に進もうが同じことなのです。より楽しい未来をつかめるか。そのポイントは、自分の中に生まれるちょっとした興味に気づくこと、そして、その興味に気づいたら考えて次の行動に移ることだと、今回の駿建をつくりながら感じました。私と建築で池田先生がおっしゃっていた「それぞれができる努力を」という言葉もまた印象的でした。学生時代には失うものがほとんどないからこそ、どんどんチャレンジを！ その先には挫折よりもきっと楽しいことがたくさん待っていると思います。（大西正紀+田中元子/mosaki）

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>